

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32644

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010年度～2011年度

課題番号：22820059

研究課題名（和文）

明治期の文人ネットワークにおけるジャンル横断的な文化交流の総合的研究

研究課題名（英文）

Comprehensive study on cross-genre communication within the writers network of the Meiji period

研究代表者

出口 智之 (DEGUCHI TOMOYUKI)

東海大学・文学部・講師

研究者番号：10580821

研究成果の概要（和文）：

幸田露伴たちが明治 20 年代に結成していた文人サークル、根岸党について、成立から解体までの活動の詳細を解明した。具体的には、不明だった成立・解消の時期をそれぞれ明治 10 年代後半・明治 27 年ころと特定し、またメンバーの詳細も明らかにした。そのうえで、根岸党を旧時代に殉じた逃避的享楽の場とする従来の捉えかたを訂正し、時代の中心で活躍する文化人たちも一方で他愛ない遊びに本気で興じるような、明治という時代の多様性のあらわれと捉えなおすことで、その文化史的意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study brings to light details of the Negishi-to (Negishi party), a circle formed in the Meiji 20s by famous writers, painters and journalists, including Rohan Koda, from its formation to dissolution. Specifically, the time of formation and dissolution, which have hitherto been unclear, is identified to be the second half of the Meiji 10s and around Meiji 27 respectively. Details of the members are also identified in this study. In addition, the conventional view regarding Negishi-to as an apolastic circle of a by-gone era, is redressed. Now it is clarified that Negishi-to was a sign of the diversity of the Meiji era when these active persons of culture seriously amused themselves with silly games and plays. The significance of the cultural history of the Negishi-to is made clear in this study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011 年度	1,110,000	333,000	1,443,000
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：根岸党、幸田露伴、高橋太華、森鷗外、岡倉天心

1. 研究開始当初の背景

近代日本の草創期である明治時代の文人たちは、文学や美術などのジャンルが未分化であった近世文芸の影響を残し、分野を超えた活発な交流のなかで新しい文化を創り出そうとしていた。そうした彼らの人的つながりと文化交流の実相を解明し、近世と近代の接合点たる当時の文化状況を把握したう

で明治文学を捉えなおすことは、以後の近代文学の展開を相対化し、その達成とともに失われた可能性を考えるという重要な意味を持っている。

こうした視点から、本研究では幸田露伴の文学に注目した。彼は作家としてデビューした直後の明治 20 年代、根岸党という文人サークルに加わり、活発に遊んでいたことが知

られている。その概略はすでに塩谷賛『露伴と遊び』（創樹社、昭和47年）などで紹介され、また研究代表者本人も出口智之「根岸党の文学空間」（『国語国文』平成18年6月）などの成果を得ており、このサークルが近世文人の伝統を継いだジャンル横断的な文化交流の場だったことがわかっている。

ところが、このサークルには作家のほか、俳人や劇評家、画家、美術思想家などから編集者、官僚、裁判官にいたるまで様々な人物が加わっており、そのジャンル横断的な性格のため包括的な研究はまったく行われてこなかった。またその史的な位置づけも、木下長宏が『揺れる言葉』（五柳書院、昭和62年）で提出した、旧時代に殉じた逃避の享楽とする見かたを完全に払拭できてはいなかった。そうした幸田露伴の文学的出自の不明瞭さは、明治から昭和までの三代を生きた彼の文学を総合的に捉える視点の欠落にもつながっている。従来の露伴研究は最初期に書かれた小説作品に集中するばかりで、江戸文人の系譜を継いだ中期以降の随筆・史伝等の具体的な検討はほとんど行われてこなかったのである。

そこで、本研究では次のような目的を設定した。

2. 研究の目的

(1) まず、根岸党を中心とした文人ネットワークの立体的把握を行う。とりわけ、研究代表者がすでに前掲「根岸党の文学空間」で調査した、根岸党の遊びを描いた作品をより具体的に精査し、その人脈・活動内容・文化史的意義などを総合的に解明する。あわせて、これまでの研究過程で慶應義塾図書館に所在が確認された高橋太華（編集者、根岸党の中心的人物の一人）の日記、および研究代表者が太華の遺族から寄託を受けた太華宛の書簡集についての研究を進め、新聞・雑誌上で公にされた作品のみにとどまらない、一次資料を用いた実証的な研究によって彼らのネットワークの全貌を明らかにする。そのうえで、根岸党における近世と近代の特質を併せ持った文化交流の動態を解明することを、第一の目的とする。

(2) 露伴の歴史小説および史伝作品を本格的に検討する。特に、露伴が生涯にわたって書き続けた歴史上の人物を題材にした作品の形式が、明治末に小説から史伝へと変化していることに着目する。これは、次第に小説に重きを置くようになる文壇の趨勢とは対照的であり、そうした露伴の行き方の背景には、近代文学の草創期たる明治中期、多様な文人との交流のなかで近世文芸の影響を受けつつ出発したという彼の文学的特質があるものと考えられる。そこで、(1)の研究で

得られた知見をもとに、明治から大正期に書かれた露伴の歴史小説や史伝を幅広く取上げ、彼の文学の独自性を探り、ひいては近代文学の展開を批判的に捉えなおすことを第二の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 第一に、根岸党の全体を作品および一次資料によって論じなおす。それに際して特に重視したいのは、以下の二点である。

① まず、慶應義塾図書館に所蔵が確認された、高橋太華の日記の翻字および研究を進める。明治25年1月から3月の間に書かれたこの日記は、期間こそ三ヶ月と短いものの、根岸党の人々との連日の交流が詳細に記録されている点で注目に値する。特に、滝亭鯉丈『花暦八笑人』（文政3年～天保5年）の朗読会や歌舞伎の劇評会など、近世と近代との文化的接合点たる根岸党の性格を端的に示した重要な記事も存在しており、こうした点に着目することで、公にされた作品の文章からだけでは十分に明らかにできない、根岸党の実態と文化的性格について研究を進める。また、この日記には岡倉天心や東京美術学校の画家たち、国粹主義的活動家たち、出版人たちなどとの親密な交際も記されており、それらの記述を詳細に検討することによって、明治の文人が築いていた人的ネットワークの解明を進める。

② 続いて、高橋太華の遺族から寄託を受けた400通に及ぶ太華宛の書簡群の整理・翻字を本格的に進める。特に、根岸党の文人たちから寄せられた書簡のほか、太華が密接なつながりを持っていたジャーナリストの西村天四や石井研堂、美術家の高村光雲や寺崎広業、日本美術院関係者の塩田力蔵らの書簡などを取上げ、根岸党の文化的位置を考察するとともに、彼らを取巻いていた周囲の文化人のネットワークを解明する。そのうえで、より研究の幅を広げ、日清・日露戦争期から第一次世界大戦期、日中戦争期にかけて大陸で活動した国粹主義的な活動家たちからの書簡の翻字も進め、最終的には歴史学・思想史など隣接領域にも益するところ大きいと思われるこの書簡群について、総合的にデータベース化して公開することを目指す。

(2) また、「2. 研究の目的」(2)の目的を達成するため、幸田露伴の史伝作品を取上げてその方法を解明するとともに、森鷗外や坪内逍遙ら、同世代の文学者たちとの比較を通じ、露伴作品の文学的位置づけを探る。

具体的には、露伴が書いた長篇史伝の第一作「頼朝」（明治41年）、中国明代の靖難の変を描いた「運命」（大正8年）等を扱い、

露伴が執筆にあたって典拠とした資料を調査することで、どういった取捨選択・物語化の方法を用いて作品として再構成されているかを実証的に解明する。そのうえで、近代のアカデミズムを身につけて厳密な考証を基本姿勢とした鷗外と、根岸党における年長者との交流から得た教養を土壌とし、古人の人間性を広がりのある歴史空間のなかに描き出した露伴の相違という観点、また鷗外や露伴らとおなじく明治20年代に活躍した坪内逍遙や山田美妙といった作家の多くが、明治末から大正期にかけて歴史を題材とする作品を書いているという文学史的観点を重視し、新旧の文化の混淆期である明治前期の特徴を残した露伴の文学の独自性と、次第に偏狭さを強めてゆくその後の近代文学に対する批評性を究明する。

以上のような方法に従って研究を進めた結果、現在までに以下の結果を得ることができた。

4. 研究成果

(1) 根岸党に関する研究

① まず、根岸党については成立から解体までの活動の詳細を解明し、『幸田露伴と根岸党の文人たち—もうひとつの明治』(教育評論社、2011年)にまとめた。その内容は、従来ほぼ不明とされてきた成立・解消の時期をそれぞれ明治10年代後半・明治27年ころと特定したうえで、構成メンバーや各人の関わりの濃淡、党の活動を描いた作品などを詳細に紹介したものである。

根岸党に関する基礎的な情報については、研究代表者が「根岸党の文学空間」(前掲)で発表したものによっているが、同論文では十年近くにわたって活動した根岸党の構成員や、発表した作品などを紹介するにとどまり、文化史的意義についての考察は不十分であった。また、作品自体の読解も十分に展開できず、根岸党による文学作品の特質を解明できたとは言いがたかった。そこで、本研究では第一に、彼らの旅を描いた紀行文「塩原入浴の記」(明治21年)、「駆めぐりの記」「箱根ぐちの記」「山めぐり」(以上明治22年)、「木曾道中記」「乗興記」「をかし記」(以上明治23年)、「女旅」(明治24年)、「二日の旅」「草鞋記程」(以上明治25年)、「足ならし」「月ヶ瀬紀行」「探花日暦」「春の旅」「まき筆日記」(以上明治26年)などを取上げ、詳細に検討した。その結果、根岸党が活動を始めた明治21年～明治22年のころは、旅をする彼らが数人で一体となって失敗し、その滑稽さを直接読者に向けて演出しているのに対し、次第に参加する人数が増えるにつれ、党员同士でたがいに意識しあって失敗してみせるようになっていったことが明らかに

なった。かくして、根岸党の文学作品は一般読者に対して開く姿勢を次第に失ってゆき、やがて一般の読者に向けた作品が書かれなくなることで、その文学活動が終息したことが判明した。

また、こうした作品以外にも、本研究ではじめて紹介・検討できた資料は数多い。早稲田大学図書館蔵の饗庭篁村宛高橋太華書簡(明治40年8月25日)、有馬の山下温古堂薬局蔵の太華と露伴の宿帳、慶應義塾図書館貴重書室蔵の高橋太華の日記「雅俗日記」、『夕刊毎日新聞』(昭和26年6月9日)に写真版が掲載された太華・露伴合作「道中記」(未発表)などは、これまでその存在すら知られていなかったものであり、こうした資料を発掘することで根岸党の活動の解明に役立てられた。公にされた作品とは異なる性格を持つこれらの資料を検討してみると、根岸党では作家や画家などの文人のみならず、新聞記者や思想家、裁判官、官僚など様々な人が集まって、気ままな遊びを繰広げていた状況が見えてくる。それは、単なる文壇や画壇における派閥とは異なり、より多彩な文化人たちが自由に参集して交流していた、それぞれの専門領域が細分化される以前の明治中期の文化的空気を端的に示すものであった。

このように、根岸党が同時代に活躍していた尾崎紅葉らの硯友社や、森鷗外らの千駄木派のような確固たる組織・派閥ではなく、より自由な遊びの集団であったことは、すでに早くから指摘されていたが、だがそれゆえに、彼らは旧時代への懐旧の念を抑えがたい明治からの敗残者、新時代に対して消極的に反抗する享樂的集団と見なされてきた。しかしながら、上記のような作品や資料を検討した結果、そこには上級官僚や流行作家、また新進の青年文学者であった露伴や太華らも加わっていたことが判明し、旧来の見かたを修正する必要に迫られた。そこで本研究では、根岸党とはむしろ、真摯な言論や芸術、政治、ジャーナリズムなどの場で中心的に活躍する人物も、一方では他愛ない遊びに本気で興じることができた、明治という時代の多様性のあらわれと考えるべきであると捉えなおした。これによって、江戸期の遊びの精神と感性を保ったまま新時代を迎えた人々が、旧き感性と新時代の思潮や新しい文物とを自然に融和させていた、近世と近代との接合期にあたる明治の文化の実相と、そうした交遊の空気を作品に描き出した根岸党の文化的位置が明らかになったのである。

② ①の『幸田露伴と根岸党の文人たち—もうひとつの明治』にまとめた研究では、根岸党の性格と明治中期の文化状況については詳細に明らかにすることができたものの、そ

の過程で所在を確認できた太華の「雅俗日記」には、根岸党の人々のみにとどまらない、幅広い人脈との交流が記されていた。そこで、この資料はより広い分野の研究に益するものと判断し、全文を翻字して注釈を附し、紹介することにした。すでに「高橋太華『雅俗日記』(明治二十五年) 翻印と注釈(一)」「同(二)」として公にしたのは、明治25年1月1日から27日までの部分であるが、この期間だけでも出版関係者の山県悌三郎・和田篤太郎・高橋省吾、批評家の斎藤緑雨、国粹主義的活動家の鈴木天眼や佃信夫、トルコ貿易に従事した山田寅次郎、鷗外の友人だった画家の原田直次郎や医者への賀古鶴所、彫刻家の岡崎雪声といった実に多様な人物との交流が記載されている。この翻字・注釈作業は研究期間中には終了しなかったものの、現在も引続いて行っており、2012年度・2013年度にかけて完了させる予定である。

③ 太華の遺族から寄託された太華宛書簡群については、ロバート・キャンベル氏(東京大学大学院教授)らの協力によって、順次翻字作業を進めており、すでに240点あまりの翻字が終了している。しかしながら、資料の全体は400点近くという膨大な数であるうえ、差出人がきわめて多岐にわたるため、筆跡等の違いにより効率的な翻字を行うことが難しい。すでに翻字した書簡の一部は、①の『幸田露伴と根岸党の文人たち—もうひとつの明治』に生かすことができたが、残る書簡については、基礎的な翻字作業を地道に進めてゆくほかない。今後、この作業についても2012年度・2013年度にかけて完了させ、キャンベル氏との共同により一般に向けた展示、影印の出版等を企画している。

(2) 幸田露伴の歴史小説・史伝に関する研究

露伴の史伝「頼朝」(明治41年)を考察対象とした「幸田露伴「頼朝」論—露伴史伝の出発—」(『国語と国文学』平成22年4月)では、執筆にあたって用いられた資料を『参考平治物語』『参考源平盛衰記』『吾妻鏡』『真名本曾我物語』などに特定し、さらにこれらの資料の不足部分が、『増訂豆州志稿』(明治21~28年)および伊豆の民間伝承によって補われていることを明らかにした。この調査により、作中では雑多な資料が成立年代・資料の種類などに関わらず、ほぼ同列に扱われていることがわかり、従来は学究としての研究の成果と考えられてきた露伴の史伝は、実際にはフィクションとして捉えるべきであることが明らかになった。そのうえで本作において、資料を引用しつつ作者自身の言葉でそれを敷衍するという随筆に近い様式が選ばれた理由を、資料にない架空の事実を捏造す

ることへの露伴の忌避意識に求め、その形式によって本作が、個々の逸話の背景にある頼朝にまつわる広大な言説空間の存在を浮かびあがらせ、小説形式では不可能な作品世界の広がりを生み出しえたことを指摘した。そして、坪内逍遙や森鷗外、山田美妙ら、露伴とおなじく明治二十年代にデビューした作家たちが、この明治末から大正期にかけて一様に、小説とは別の形式によって歴史を扱おうと試みていることに着目し、そうした動きに、逍遙の『小説神髓』をはじめとする彼らの世代が積残した、文学はいかに歴史を扱うべきなのかという課題の解決法の模索を見た。

これは専任職への就職によって中断した日本学術振興会特別研究員PDとしての研究課題「明治期の文人ネットワークに見る近世との文化的接続に関する研究—幸田露伴を中心に—」の成果とリンクするものである。本研究においては、この「頼朝」に関する研究や、それ以前に発表した「二日物語」「椀久物語」「風流魔」(明治31~34年)などに関する研究について、その後の調査結果や(1)の根岸党に関する研究から得られた知見を加え、増補して公開することを企図した。この作業は2012年6月現在、出版準備の最終段階に入っており、2012年夏に青簡社より『幸田露伴研究』(仮題)として刊行する予定である。これによって、若き日に根岸党にあって近世文芸の伝統や精神に触れた露伴が、小説を中心とするような近代文学の潮流に逆らい、より自由に文献資料を用いて人物観・歴史観などを語ってゆく随筆的史伝の世界へと進んだ道筋を跡づけることができた。特に、根岸党で身につけた遊びの精神については、自由な語りを特徴とする史伝において、文脈とは無関係に差挟まれる冗談や時代を超えた話柄の接続などを生み出し、広がりのある作品世界の創出につながっていることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- ① 出口智之、高橋太華『雅俗日記』(明治二十五年) 翻印と注釈(二)、東海大学紀要文学部、査読無、第95輯、2011年、89~102頁
- ② 出口智之、高橋太華『雅俗日記』(明治二十五年) 翻印と注釈(一)、東海大学紀要文学部、査読無、第94輯、2011年、77~89頁
- ③ 出口智之、根岸党の旅と文学—『草鞋記程』の成立考証から—、論集笑いと創造、査読無、第6集、2010年、409~436頁

- ④ 出口智之、幸田露伴「頼朝」論—露伴史伝の出発—、国語と国文学、査読有、第 87 卷第 4 号、2010 年、50～67 頁

[図書] (計 1 件)

- ① 出口智之、教育評論社、幸田露伴と根岸党の文人たち—もうひとつの明治、2011 年、303 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出口 智之 (DEGUCHI TOMOYUKI)

東海大学・文学部・講師

研究者番号：10580821